

アイヒェンドルフ文学における「書物」と「読者」 -〔1〕

著者	久保田 功
雑誌名	金沢大学文学部論集. 文学科篇
巻	14
ページ	A87-A99
発行年	1994-03-29
URL	http://hdl.handle.net/2297/5244

アイヒェンドルフ文学における

「書物」と「読者」——〔I〕

久保田 功

I はじめに

J. v. アイヒェンドルフ (1788—1857) と彼の文学に関する研究は、この詩人の没後100年にあたる1957年前後を境にして急激な進展をみせた。さらに生誕200年の節目にあたる1988年頃に一段とはずみがかかったことは、研究文献の数量の増加のみならず、そこで駆使される方法論の多様さにも窺い知ることができる。

こうしたアイヒェンドルフ文学に関する最近の研究動向を概観すると、おおよそ5つの主だった流れがあるように思われる。ひとつは、この詩人の時代批判性を指摘して、彼の文学を同時代の政治上の諸々の事象に引き付けて再検討し、従来顧みられることの少なかった側面を掘り起そうとする方向性に見られる。また同じように、新しい側面に光をあてる作業は、彼とロマン主義の関係についても改めて問い直す形ですすめられている。彼がその晩年に執筆したロマン主義文学論ばかりではなく、初期の段階での小説や詩作品を手掛りとして、専ら穏健な「最後のロマン主義の詩人」と評されてきたこの詩人を、あえて初期ロマン主義の文学理論をめぐる論議のただ中に引き入れて、F. シュレーゲルやノヴァーリス等の文学論に絡ませ、その上で「ロマン主義者アイヒェンドルフ」の独自性を浮かびあがらせようとする。この詩人にまわりついでいる、単なる素朴な民謡風ロマン主義詩人という見方では捉えきれない部分を、彼の極めて強靱不変の文学論の主張とその実践に指摘するわけである。第3番目の動向は、アイヒェンドルフとその文学の現代性 (Modernität) を問う試みに認められる。従来郷愁的愛着をもって受け取られることの多いこの詩人の作品の立脚点から、今や生誕200年を迎えた今日の時代状況の中で、現代文学のかかえる諸問題をどの程度説明しうるのかを問うものである。当然のことながら、アイヒェンドルフ研究自体も、その際おのずと学際的・国際的な視野の拡大を実現することになったことは言うまでもない。こうしたアイヒェンドルフ文学の現代性を検証しようとする研究動向は、特に1960年代の新しい研究の成果に促されたものであることは明白で

ある。議論はそれらの成果を踏まえた上で展開されている。ところで、こうした研究成果の主要なものひとつに、アイヒェンドルフ文学における風景論があり、この風景論を軸に彼の文学表現の特徴に関心が集中している。それが第4番目で、主にこの詩人の作品に顕著に表われている、定式的な型通りの表現とその繰り返し、つまり、表現の類型的定式性 (Stereotype Formelhaftigkeit) の文学的意味ないしは詩的機能をめぐる研究であり、これは量質ともに最近の研究では群を抜いて目立っており、興味深い。5つ目の動向は、この詩人及び彼の作品の受容及びその歴史をめぐる研究である。そもそも受容史そのものについての議論がある一方、アイヒェンドルフ全集にあらたに追加された夥しい分量の、この詩人に関する受容者側の記録文書は、こうした研究にきわめて豊富な資料を提供することになった。無論こうした研究は、彼の文学を受容者としての読者との関係から捉え直そうとするものであるが、重点はむしろ受容する側の検証に置かれている。つまり、広範な読者層に受け入れられた作品、とりわけ『のらくら者の生活より (Aus dem Leben eines Taugenichts)』や特定の抒情詩に限定される作品受容の様態に、それぞれの読者の生きた時代の固有の（あるいは共通した）事情の反映を読み取り説明しようとするものである。無論こうした主要な研究動向に組み入れて考えにくいだが、しかし極めて独創的な視座を示す数多くの論述があり、他にも伝統的な伝記記述をより一層豊かな資料を盛り込むことによって緻密に仕上げた著作があることは言うまでもない。それら全体が最近のアイヒェンドルフ文学研究の活況のみならず、その研究の多様さと精緻さをうかがわせるものである。従って、主要な研究動向と言えども、それらは相互に密接な議論の関連があり、個別に切り離せるような性質のものではない。

そうした総合的観点からさらに最近の研究動向を概観すると、特に際立っていると思われるのが、上述した第4番目と第5番目の研究の相互の結びつきである。つまり表現の類型的定式性をめぐる議論とアイヒェンドルフ文学の受容の様態に関する議論の絡みである。例えば、アイヒェンドルフ文学の影響史 (Wirkungsgeschichte) をいちはやく手懸け、その後のこの詩人の受容 (Rezeption) ないしは受容史 (Rezeptionsgeschichte) 研究に今日もなお強い影響を与え続けている E. Lämmert の論文 (1967年) がある。彼がこの詩人の表現の類型性に、読者層の諸々の理想・願望を受け入れる一種の文学的装置——彼はそれを「空の器 (Hohlgefäße)」と呼んでいる——を指摘しているのは、その一例である⁽¹⁾。しかし、概して、類型的定式表現に関する論究は、主にこれの詩的機能の説明と解釈に終始しているきらいがあり、他方受容史

研究においては、読者という存在が、アイヒェンドルフ自身においてどのように想定され位置づけられているかについては、そうした研究の性質上あまり触れられていない。彼の文学作品が、それぞれの時代に実在した、様々な現実の読者ないしは読者層にどのように受け入れられ、そしてその受容の様相は、この具体的読者の帰属する時代のいかなる事情を反映するものなのであるか、その点に関心が向けられているからであろう。しかし、最近にわかに論究が集中してきた観のある、このふたつの問題を結びつけて考えるためには、あらかじめ次の点について掘りさげておく必要があるように思われる。ひとつは、彼の文学表現の特異な形式して指摘されることの多い、典型的定式性の個々の詩的機能や文学作品における意味解釈を行う前に、これがそもそもアイヒェンドルフの「文学 (Poesie)」とどうかかわり、それはいかなる由来を持つものなのかを問わねばならないだろう。なぜなら、この詩人の「文学」論は、本質的にそうした特徴ある表現の詩的機能の基盤となっており、密接につながるはずのものであるからである。また他方、この詩人にとって、そもそも「読者」なる存在はどのように理解されていたのか、この点もあらかじめ知っておく必要があるだろう。アイヒェンドルフの描き出した「読者」と彼の同時代ないしはその後の現実の読者との関係に、受容史的レベルの考察においても興味深い異同がないとは言い切れないからである。そこで、このふたつの点を検討するために、前者については、「文学 (Poesie)」の表現の総体としての「書物 (Buch)」という視点を導入し、これをもうひとつの視点「読者 (Leser)」と関連づけたいと思う。アイヒェンドルフ自身にとって、以下で論ずるように、「書物」と「読者」は決して無関心の対象ではなく、むしろ「詩作すること (dichten)」あるいは「詩人 (Dichter)」の存在と、いわば三位一体の関係にあるものと理解されており、彼の「文学」論の核心をなすものであると考えられる。しかも、「詩作すること」、「書物」そして「読むこと」は、彼の文学観の内実を形成する主要な領域であるばかりではなく、その各領域に関する彼の主張は、彼を取り巻く同時代の文学的状况に対しては、しばしば痛烈な批判性を帯びることにもなる。

II ロマン主義における「書物」と「読者」への関心

アイヒェンドルフの文学作品及び文学史関係の評論を含む著述の中に、「書物」ないしは「読者」に関連する箇所が頻繁にあらわれるのは、決して偶然ではない。例えば、「読書 (Lektüre)」は、この詩人の主要なテーマであり、「旅の詩人」と「森の詩人」とされるのが常である彼にあっても、「読む」こ

とは、登場人物の「旅をする」と同等の重要な行為としてさかんに描き出され、両者が判然と分かち難くなる場合すらある。「旅をする」ことが、「読む」ことに重なるその様なケースでは、「書物」はメタファーとして、そのイメージが飛躍的に拡大し、もはや印刷された一冊の「書物」ととどまらない。また「森」もこの詩人にとっては、「読書」に最適な空間として人物たちを迎えることがある。そうした描写においては、「森」は「読書の場所」として特別の位置づけがなされるばかりか、「森」はその謎めいた符号性を潜めた空間として、同時に巨大な「書物」の様相を呈し始めるのである。このように「書物」や「読者」が、作品中に数多く登場してくる背景には、アイヒェンドルフの文学上の出発時点での、伝統の継承や「書物」を取りまく同時代の文学状況があったことはまちがいないであろう。

18世紀末から19世紀初頭にかけてのロマン主義文学の展開の中で、「書物」と「読者」への関心がにわかに高まったことは、その痕跡が彼らロマン主義者たちのプログラムのな文学理論のみならず、日常の書簡にさえ現われていることから窺い知ることができる。これは無論、ヨーロッパ文学の伝統の中で培われて慣習化したトポスとしての「書物」⁽²⁾というものを、彼らもまた受け継ぎ、それを自分たちの組み入れた文学理論や言葉の独特な使用法に持ち込んだと見ることもできる。しかし、これとは別に彼らが「書物」に執着をみせるのは、通俗・大衆小説類の大量生産とその消費者としての読者層の拡大という相互の関係によって生じた、「書物」の商品化に対する苦々しい詩人資質の反発と無関係ではないだろう。つまり若い世代のロマン主義の提唱者たちは、「書物」の商品化や低俗化に対しても、また病的な読書熱 (Lesewut) に冒された「読者大衆 (Lesepublikum)」に対しても、批判的に立ち向かわざるを得なかったわけである。18世紀末から19世紀初頭にかけての、こうした「書物」をめぐる社会状況のただ中で、彼らは「書物」の大変革を招来すべく、すでに硬直化した伝統的トポスとしての「書物」を、「自然」や「世界」にあらためて重ねあわせ、そこに自分たちの文学的思索のすべてを注入して活性化させようと試みたと考えてよいだろう。そうであるが故に、彼らにおいては、「書物」も「文学 (Poesie)」も「小説 (Roman)」も、明確には区別しがたいタウトロジーの趣を持って相互に関連づけられているのである。

F. シュレーゲルが、『小説についての書簡』の中で、「小説 (ein Roman) はロマンティシユな書物 (ein romantisches Buch) である」(KA. Bd. 2-S. 335) と言い切っていることはよく知られている。彼は自分の文学理論の核心的ジャンルとしての小説を、「世界」として表象される巨大な「書物」と重ねる

ことによって、無際限に生成し「進展する普遍文学 (eine progressive Universalpoesie)」(KA. Bd. 2-S. 182) としての小説を提唱したわけである。この「書物」は、決して商品として矮小化された「書物」ではなく、別のフラグメントで述べているような、「永遠に生成する書物 (ein ewig werdendes Buch)」あるいは「無限なる書物 (ein unendliches Buch)」(KA. Bd. 2-S. 265) として考えられている。同様の「書物」イメージは、ノヴァーリスが主張する、百科全書的に世界を網羅した書物としての小説の要請にも認められるだろう。また彼の文学的要請に従えば、「小説は徹頭徹尾詩 (Poesie) でなければならない」のであり、「純粹にポエティシユな書物においては、すべてがきわめて自然にみえ、しかしまたきわめて不可思議なものとみえる」(NS. Bd. 3-S. 558) のである。ノヴァーリスにあっては、「書物」の中に詩を、すなわち「心情の描出」であり、「内的世界をその総体において描出する」ポエジー (NS. Bd. 3-S. 650) を蘇らせることによって、「書物」としての文学の革命を実現することが理想であり、文学者につきつけられた急務であった。他方彼には、描出の手段である「言葉 (die Worte)」が、すでにそれ自体「内的な力の領域の外部への開示」(NS. Bd. 3-S. 650) に他ならないと考える言語観があり、この点からも「書物」はひとつの「世界」であるという信念が支えられている。1799年8月6日、ノヴァーリスはL. ティークに宛てた書簡の中で、「貴兄と知りあいになれたことは、私の人生に一冊の新しい書物 (ein neues Buch) をかかげてくれました」(NS. Bd. 4-S. 293) と感動的に書いている。これは新しい友人関係が、あらたなる世界を自分に広げてくれるという期待を、日常的な比喩としての「書物」のトポスを使って相手に伝えているに過ぎないとも受け取られる。しかし、1800年2月23日付のL. ティークの宛の別の書簡から知られるように、ノヴァーリスの感動は、L. ティークによってJ. ベーメ (Jacob Böhme) の「書物」に触れ得たことによるものである。J. ベーメの「書物」は、ノヴァーリスによって「世界」を孕むものとして理解され、「ミクロコスモス」として受け取られている様子を知ることができる。内なる世界である心情と外部世界としての自然の呼応を、ベーメの神秘主義と自然哲学的観念を仲介として詩的に実現させる、それがノヴァーリスの文学であろう。言葉が内部世界を開示するものであると同様に、自然なる外部世界もそこに謎めいた言葉を潜めて人間に呼びかけて来る。「書物としての自然」は、慣習的な言辭から一気に文学的に活性化され、「自然の書物」を解読することが、例えば『ザイスの弟子 (Lehrlinge von Sais)』の課題となっていることは周知の事柄である。

他方ノヴァーリスやF.シュレーゲルの「書物」観には、「聖書(Bibel)」の影が常に見え隠れしている。先に触れた「永遠に生成する書物」を考えたF.シュレーゲルは、その文学的構想の基底となっているのが「聖書」であることを否定しない。ただその場合でも、やはり、ヨーロッパのキリスト教世界に受け継がれた慣習的言辞に、あらためて文学の理論綱領のエネルギーが注入されていることは見逃すことはできない。だからこそ、ノヴァーリスにとって「聖書」が「書物というものの理想」(NS. Bd. 4-S. 262)であり、F.シュレーゲルもこうした理解に同意しつつ、「聖書」を「文学の中心形式(die literarische Centralform)」(NS. Bd. 4-S. 506)とみなすのである。

さてこうしたロマン主義文学理論とその潮流の中にアイヒェンドルフを据えてみれば、「書物」や「読者」をめぐる彼の理解が、決してすべて彼独自のものとは言い難く、そこには、伝統の継承や同時代の思想や文学潮流の影響があったことは、容易に推測できる。つまり、一方ではヨーロッパ文学の土壌に培われてきたトポスの受け入れであり、他方ロマン主義者たちの文学理論の構築にあたって、新たなエネルギーを注入され活性化されたメタファー性の継承と見てよいだろう。しかし、これは、アイヒェンドルフの「書物」と「読者」を考える際の前提にすぎない。この詩人にはこの詩人特有の理解の仕方がある。それは決して、F.シュレーゲルやノヴァーリスの言葉のように、先鋭難解な文学理論や形而上学の形で耳目を引くことがない。むしろ揺ぎない文学理解として、彼の文学作品をはじめとして、彼の多岐にわたる著作の到る所に現われる。

III アイヒェンドルフにおける「書物」と「読者」への関心

アイヒェンドルフは歴史の長い過程の中で現われた、「書物」や「読者」の様々な現象や実態を、常に好意的に観察し肯定し納得しているわけではない。時にみせる彼の「文字」や「書物」に対する懐疑と不信は、文字を表現手段として創作せざるを得ない詩人の自己否定とも受け取られかねない、激しい批判となって現われることも稀ではない。人間の心情や自然の生命力が文字という表現媒体を経て描出される際に、文字が本来持つはずの世界表出のエネルギーを喪失して、枯渇硬直化し、単なる日常的言語に墮していると感じるや、アイヒェンドルフの批判は、「文字」と文字を駆使する「作家」、その「書物」と「読者」に容赦なく向けられる。とりわけ、「書物」が「創造される」のではなく、実利的経済的原理に従って、大量に「生産される」ような事態に対しては、彼の批判も絶望的な口調を帯びることになる。民謡風抒情

詩人と称されることの多いアイヒェンドルフであるが、もともと歌や民謡の文字化に対しての態度は必ずしも積極的とは言えない。彼の作品中にも、書きとめることによって失なわれてしまう歌の生命を感じて、文字化することにとまどいをみせる人物描写が少なからず認められる⁽³⁾。また「民謡は歌の中にのみ (nur im Gesang) 生きる」(HKA. Bd. 9-S. 146) という信念は、彼の民謡論の根幹をなす考え方である。それどころか、「文学 (Poesie)」とは「言葉のない歌 (Lied ohne Worte)」(HKA. Bd. 9-S. 21) に倣うべきものと考えているのが、他ならぬアイヒェンドルフ自身である。だからと言って、ただちに彼を「文字」や「書物」に対する全くの不信者と決めつけるのは、大きな誤解である。むしろ彼は「文字」や「書物」の信奉者である。ただ、それは彼が終始一貫持ち続けた、文学の基本的理解と表裏一体をなしている「文字」や「書物」に対する信奉であって、必ずしも現実の「文字」や「書物」に対してではない。従って、彼は常に現実のそれらを乗り越えて、自らのうちに形成された理想の「文字」や「書物」の在り方へ近付こうとする。そこに自らに課した「文学 (Poesie)」の課題があり、また文学一般に対する要請もそこから生れる。とすれば、歴史上に現われた「文字」や「書物」、あるいは「作家」や「読者」の実態に対する彼の激しい憤りや批判は、むしろ、そうした批判の尺度となり得ている理想的「文字」や「書物」の在り方に対する、揺ぎない信念に根ざしているものと理解することが妥当であろう。一体アイヒェンドルフが理想として考え、自分の文学の範例とみなしているのは、どのような「文字」であり「書物」であるのだろうか。このことについては、後で少し詳しく検討したいと思う。従って、ここでは彼の「書物」批判と並べて、理想的「書物」の輪郭だけを例示するにとどめたい。多少長い引用になるが、その主張は明確であり、ほとんど説明の必要はない。一方は1857年つまり詩人の没年を発行年とする大部の『ドイツ文学史 (Geschichte der poetischen Literatur Deutschlands)』の一節であり、他方は1815年、つまりこの詩人が初めて本名を使って発表した、最初期の小説『予感と現在 (Ahnung und Gegenwart)』からの引用である。この詩人の長い文学活動の両端に位置する著作品であるが、それぞれの物の言い方にほとんど違いは感じられない。

「活版印刷術 (Buchdruckerkunst) の発明もまた、散文 (Prosa) へと促す最後の、そして微々たるとは言いがたい一撃を与えた。かくして、生々とした言葉のかわりに活字 (Buchstabe) が、そして打ち解けた身ぶり手

ぶりの話者にかわって孤独な読者 (der einsame Leser) が登場することになった。印刷された書物 (das gedruckte Buch) は、記憶やまた総じて精神にとっての早見表と同じように、何かミイラのような定常の、取り決めの済んだ約束ごとといった風で、確かにこうしたものには、いつだって楽々と安らぐことができよう。しかし、一方で生々とした伝統というもの、それが実際に生命を持っている限り、必然的に絶えず形成し続けるものなのである。とは言え、印刷によって事実、すべての文学は、誰しものが随意にそのページをめくることになる一冊の書物 (ein Buch) となった。この事情から、生産する人々にも消費する人々にも、一般的なディレッタントイズム (ein allgemeiner Dilettantismus der Producenten wie der Consumenten) がうまれることになった。… (中略) …これとは逆に、今では夢想家をもって任ずる人間は誰れでも、自分の安っぽい知恵を、——「(印刷されたように) ひどい嘘をつく」という民衆の言い方は実に的を射ているわけだ。——真珠や何もかもごちゃごちゃと乱雑に置かれていて、誰しものが好き放題当てずっぽうに手を伸ばしてつかむことのできる、巨大なガラクタ市場 (Plundermarkt) に持ち込んで並べるしまつである。これは驚くべき混乱であり、どうやら今日に至ってもなお成長し続けているらしい。料理女はナイフを拭きながら『オルレアンの少女』を読み、御婦人は『ミミリー』に読み耽っておるのですから。際限のない競争というものは、すべての工場制度 (Fabrikwesen) には本当に役立つのでありましょう。ここでは競争自体が製造につながっております。貧しい詩人 (der arme Poet) は、少なくとも10年間不減なることを望むつもりなら、常に新しい人気とり (neue Knalleffekte) によって混沌たる大衆の寵愛を被って、自分のライバルを押しよけるよう努めねばならない。かくして賤しき詩人 (Dichterpöbel) と賤しき読者 (Lesepöbel) の間には、絶え間なくおぞましいばかりの愛情関係と秋波を送りあう関係がうまれるのである。」

(HKA. Bd. 9-S. 96-97)

アイヒェンドルフが『ドイツ文学史』の中で、散文化の傾向を問題にしているこの箇所は、実は漠然と「過渡期 (Uebergangsperiode)」として捉えられた15世紀前後の時代であり、そこに顕著になった文学の「世俗的方向 (Weltliche Richtung)」を論じた部分である。しかし、アイヒェンドルフの皮肉ばい記述は、自分の生きた18世紀末から19世紀半ばの文学状況や「書物」をめ

ぐる事情にむしろ向けられたものであることは明らかである。「活版印刷術」の発明によってもたらされた、それ以後の書籍市場の活況は、まさしく彼の時代においては、読者の欲求と嗜好に応ずる経済的原理に従って、A. H. ラフォンテーヌ (August Heinrich Lafontaine) に代表されるような流行作家を生み出した。彼等が、あたかも文学製造のためにしつらえられた「工場」のように、商品としての「書物」を大量に生産する有様についてのアイヒェンドルフの観察は、彼の回顧録でもある『ハレとハイデルベルク』にも書き記されている⁽⁴⁾。そこでは、ラフォンテーヌを一室に閉じ込め、いわば罐詰め状態にしておいて小説を執筆させる出版者 (Verleger) の辣腕ぶりにも言い及んでいる。こうして、出版者の経済的戦略とも言うべき実利主義に踊らされて生産された「書物」に、アイヒェンドルフが信を置くはずがない。こうした極端な現象を眼前にした詩人が、そのはるかなるかなたの兆候を、15世紀の文学現象に読み取ったのである。アイヒェンドルフが信用しないのは、そこに記されているような、生命力を失った活字という「文字」であり、安っぽい知恵をひけらかす生産者に過ぎない「作家」であり、彼等によって工場製品のように生産された、内実の乏しい「書物」であり、またむやみやたらに、新奇な人気取りの商品としての書物に手を伸ばす「読者」である。しかも、それが同時にアイヒェンドルフ自身の生きた時代に、一段と際立った「書物」をめぐる実情であったことはおさえておく必要があるだろう。

他方、アイヒェンドルフには、こうした手厳しい「書物」批判や「読者」批判と表裏の関係にあると思われる、「書物」や「読者」の理想的在り様に対する考え方があつた。例えば小説『予感と現在』第3章で、どちらかと言えば、その名前の暗示する通り、技巧的な職業詩人であるファーバー (Faber) の文学論に割って入る形で開陳されているレオンティンの見解は、ほぼ詩人自身の考え方として受け取ることができるだろう。

「君たちは自分たちの言葉のやりとりをもってすべてであると思ひ違ひをしているから、結局自分自身に確信が持てないのです。確かに私も一度は自分が世界の核心 (Weltseele) であると本気で信じ、それで世界を前にすると、一体自分がその核心なのか、それともその逆なのかさっぱりわからなくなってしまったものです。ですけど、ファーバーさん、様々な形象に彩られた人生 (Leben) というのは、詩人 (Dichter) にとっては、ちょうど見知らぬ、とうの昔に滅んだ原始の言葉 (Ursprache) で書かれた、際限もなく広大な象形文字の書物 (ein unübersehbar weitläufiges

Hieroglyphenbuch) にのぞむ読者 (Leser) の関係と同じなんです。正直極まりなく、人のいいことこの上ない世情にうとい詩人たちは、いつの世にもそこに腰をおろして、ひたすら読み続けているのです。しかし、その符号文字 (Zeichen) の古い不思議な言葉は解き明かされず、風がこの巨大なる書物のページ (die Blätter des großen Buches) をひどく速く、しかもめちゃくちゃに吹きめくるので、読んでいる人の目からは涙があふれてしまうのです。」 (HKA. Bd. 3-S. 27)

自我を世界の根元的原理として把握する主観主義を、広く近代全体を覆う精神的混乱や宗教的感情の稀薄化の根本要因とみるアイヒェンドルフにとって、この思想はいわば克服されねばならない病根であった。こうした、近代という時代把握は、特に晩年の彼の著作の著しい特徴であると言ってよいであろう。しかし、ごく一時期であるにせよ、若い時期のアイヒェンドルフ——むしろ、彼がその時期に使用したペンネームに従って、フローレンス (Florens) と言うべきであろうが——を巻き込んだ、少々自己陶醉の観がある熱病的ロマン主義信奉には、そのような主観や自我中心的な世界把握がなかったわけではない。作品中の人物レオンティンの告白のように、だがそれによって得られたものは、世界と自我の関係についての確信ではなく、むしろ混乱であり、アイヒェンドルフ自身もいちやくこれを克服して行った。その克服のプロセスに、彼の詩人としての模倣段階から独自の文学理解への自己発展の経過が重なると言ってよいであろう。時期的には、彼のハイデルベルク時代以降の時期であり、「ノヴァーリス模倣 (Novalisieren)」 (HKA. Bd. 10-S. 425) することに現を抜かしていた詩人レーベン (Otto Heinrich Graf von Loeben) からの離反が、それを具体的に物語っている。

しかし、そうした詩人としての成長の過程においても、多様な事象に彩られた世界や人生を謎めいた符号で書かれた「象形文字の書物 (Hieroglyphenbuch)」と捉える世界把握には、ノヴァーリス等の自然哲学的な神秘主義や汎神論的な自然理解の影響の跡を否定できないことは確かであろう⁽⁵⁾。にもかかわらず、すでにこの小説執筆の段階で、少なくとも「詩人」とは、世界という巨大な「書物」を読み解く「読者」である、というアイヒェンドルフの捉え方がはっきりと現われている。もちろん、この例からも分かるように、ここで言う「書物」は、あくまでも象徴性を含んだ文学的メタファーであって、現実の「書物」ではない。しかし、そのように詩的に変貌した「書物」イメージこそ、この詩人の理想とする「書物」、ひいては「文学 (Poesie)」そ

のものの本来在るべき原型と本質を明らかにしてくれるものである。また世界を読む「読者」としての「詩人」という結びつけ方には、ひとつには、そもそも人間とは世界を読み解くべく運命づけられている存在である、というこの詩人の捉え方が関係している。そしてまた同時に、「読者」たる者は、単なる享樂的な受身の行為者であってはならず、むしろ自身創造的であるために、少なからず詩人的資質が要請されるものであるとする、この詩人の理想的読者への条件が含まれているように思われる。アイヒェンドルフは1851年の『小説論』の中で、ロマン主義文学衰退以降に隆盛をきわめることになった女性の文学に関連して、次のように述べて、「読者」の実態に警告を発している。恐らくその批判は、アイヒェンドルフの理想的「読者」像からすれば、必ずしも女性読者だけに向けられたものではなかったであろう。当代の女性読者に端的にあらわれていると見たのは、恐らく現実の「読者」一般にも認められる傾向でもあったにちがいない。

「聖書と家庭用説教集が市民の家から姿を消してしまっただけで以後、今やこうした三文文学 (Schmierliteratur) が新しい教養の福音書としてそれにとってかわってしまった。そして最も熱心なそれらの書物の読者は、受動の天才 (diese passiven Genies) である女性たちである。ところで、こうした女性の読者たち (Leserinnen) は、さらに当然のことながら最も好んで女性の手になる書物 (Frauenbüchern) を、自分たちにより理解しやすいものとして求める。そのため、才能ある女性たちも、編んだ靴下よりはペンのほうへ手を伸ばし、同性たちの激しい需要や教養熱に対応しようとする。その結果、今や娯楽文学 (Unterhaltungsliteratur) は、それを生産する人間 (die Producenten) も消費する人間 (die Consumenten) も、ともに事実大部分は女性たちの手に占められているのが現状である。しかし、家庭の教養というものが本来女性たちの責務であり、従って女性たちが、あの貸本屋からの知恵 (Leihbibliothekenweisheit) を未来の世代に受け継がせていく力と立派な意志を持っていることを考えあわせると、このことは決して無関心でいられることではない。」

(NKA. Bd. 8-S. 229)

19世紀初頭以後急激に各都市に増加していった貸本屋 (Leihbibliotheken) の利用者としての女性読者、特に大衆文学 (Belletristik) の代表としての娯楽小説の読者として女性読者層の広がり、この時期の特徴としてしばしば指

摘される。A. Martino の言葉に従えば、いわゆる >ganzes Haus< の崩壊によって核家族化が進み、そのことが女性たちの読書のためのより多くの時間を与えることになり、その結果「女性たちが文学の主要なる消費者 (Hauptkonsumentinnen) となる」に至ったのである⁽⁶⁾。そうした社会学的な説明とは別に、「読者」論としてアイヒェンドルフの文章を読みかえすと、女性読者に顕著にみられるとしているのは、やはり読書行為における受動性であり、「書物」を享樂的に消費する読書姿勢である。これは先の引用に従えば、読書のディレッタントイズムであり、特に女性に限った現象ではない。世界という巨大な書物を読みとることを、読者としての人間の本質的行為としてみるアイヒェンドルフにとって、こうした読書の趨勢が好ましいものであるはずがなかったことだけは確かなことである。(以下次号)

〈注〉

- (1) E. Lämmert: Eichendorffs Wandel unter den Deutschen Überlegungen zur Wirkungsgeschichte seiner Dichtung, in: Die deutsche Romantik S. 237.
- (2) E. R. Curtius: Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter 第16章「象徴としての書物」に、ヨーロッパにおける、トポスとしての「書物」の形成と展開を概観できる。S. 306-352.
- (3) 例えば >Ahnung und Gegenwart< では、フリードリヒ (第2章) やレオンティン (第8章) が、歌を文字化することにためらいをみせ、また >Aus dem Leben eines Taugenichts< では、「民謡というのは、広々とした野や森で民衆に歌われてこそ、それは本当にアルプスに咲くシャクナゲというものさ。——>魔法の角笛<などは、ただの押花標本にすぎない。」という言葉若い登場人物に語らせている。(第1章) HKA. Bd. 3-S. 11, 83 及び W. u. S. Bd. 2-S. 356.
- (4) HKA. Bd. 10-S. 389, 392, 418. August Heinrich Lafontaine に対する批判は、アイヒェンドルフの著作の到る所で繰り返されている。文学作品では >Ahnung und Gegenwart< の第6章 (HKA. Bd. 3-S. 66), >Dichter und ihre Gesellen< の第6章 (W. u. S. Bd. 2-S. 543) では、戯画風に風刺されている。その他、文学評論や文学史では、きわめて厳しい批判がみられる。HKA. Bd. 8-S. 87, 206, 228, 374, Bd. 9-S. 216, 219, 266, 274, 288, 384.
- (5) A. Goodbody: Natursprache S. 105~160. アイヒェンドルフにおいては、ノヴァーリスに見られるような、初期ロマン主義の新プラトン主義流の自然把握に基づいて、自然を象形文字と見立てる (hieroglyphisch), 汎神論的 (pantheistisch) な自然観に、カトリック的 (katholisch) ・キリスト教的 (christlich) 象徴性 (Sinnbildlichkeit) が重ねられている、と指摘している。
- (6) A. Martino: Publikumsschichten und Leihbibliotheken, in: Deutsche Literatur

Eine Sozialgeschichte Bd. 6-S. 35.

《テキスト》及び《参考文献》

次号において、まとめて掲載する予定。ただし使用テキストについて、本文中略記したものは、下記の通りである。

- 1 Joseph von Eichendorff : Sämtliche Werke (HKA.)
- 2 Joseph von Eichendorff : Werke und Schriften (W. u. S.)
- 3 Novalis : Schriften (NS.)
- 4 F. Schlegel : Kritische Ausgabe (KA.)